

学校紹介 奈良先端科学技術大学院大学のチャレンジ

専門分野の枠を超えてコミュニケーションできる研究者を

大学院大学として多くの研究成果を生み出しながら、多様な人材を世に送り出す奈良先端科学技術大学院大学。研究科を一つに統合して異なった専門分野の融合を図り、これから一層複雑化、多様化する社会の諸課題に、全学を挙げて立ち向かおうとしている意気込みや取り組みを、就任1年を迎える塩崎一裕学長にうかがった。(聞き手・大谷武彦)

——突然の私事ですが、私の息子が貴学の卒業生で、この度大手電機メーカーを退職して起業しまして。いまのあなたは、終身雇用にしがみつこうような我々とは違いますね(笑)。

塩崎 これからは今まで以上に、大学が社会と関わってコミュニケーションをしていく必要があります。卒業生というのは非常に大切な存在になってきます。なによりも本学のことをよく知っていらっしゃる、そのうえで社会経験を積まれているので、そういう方々と話し合う機会を持ってコミュニケーションをする中で、我々もアドバイスなどを頂く必要があると思っています。

本学の「先端科学技術」という名前が難しそうな印象を与えているようですが、例えば酵母の研究をしている先生がビールメーカーとコラボしたり、沖縄の泡盛のメーカーと一緒に、熱帯の花であるハイビスカスから取った酵母で新製品を作ったりしているのです。そういう意味では、実社会に直結した面白くてわかりやすい研究をしている先生も多いのです。——面白いと言えば、米国の大学で長年、ご活躍の後、日本の国立大学の運営に当たられている先生ご自身もユニークな存在ではないでしょうか。

塩崎 私は学長になる前はバイオサイエンスの教授でしたが、そのさらに前の2010年以前はカリフォルニア大学デービス校で微生物学科の教授をしてい



奈良先端科学技術大学院大学
塩崎一裕学長

ました。研究室の運営というのは、いわば小さな町工場の経営のようなもので、人を雇用したり学生さんを受け入れたりしつつ研究費、つまり経営資金を取ってきてメンバーと一緒に研究をして成果を社会へ還元する、といった具合です。もう一つ、本学に来てからは学長補佐の仕事もするようになりました。最初は国際担当、次に教育担当ということで、大学の運営を計6年間いろんな形で見る機会に恵まれました。この二つの経験が、今この大学を運営する上でいい経験になっています。

そして組織を率いるとなると、研究室なら研究室メンバー、大学なら副学長や事務局長などの幹部をはじめ多くの方々とのコミュニケーションが重要になりますので、それを大切にやってきました。学長就任後に発表した学長ビジョンでは「共創」というキーワードを打ち出しました。これは一緒にみんなで問題やアイデアを共有して取り組むという概念で、これを本学の目指す姿として取り組んでいます。本学は学生1000名、教員200名、職員が170名くらいの比較的小さな大学ですので、お互

いの顔が見えているという特徴がありますから、共創やコミュニケーションということもやりやすいと考えているのです。本学がスタートしたときは、情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学という3つの研究科に分かれていたのですが、これを2018年に統合して一つの研究科になり、一つのコミュニティになったと言えるわけです。そこで私が学長に就任した折に、共創というキーワードを打ち出した、という経緯になります。

——共創ということについて、その趣旨をもう少し具体的に聞きたいのですが。

塩崎 研究科統合は2代前の学長の時に決定されたのですが、社会的あるいは地球的な課題、例えば地球温暖化とか今でいえば新型コロナウイルスもそうですが、SDGsに代表されるような課題というのは非常に複雑で、一つの専門分野で結論やソリューションが出てくるものではないのです。人類的な課題の解決にはいろんな分野が力を合わせる必要があって、専門家同士のコミュニケーションによるアプローチがあって初めて解決策が見えてくる、または改善する方向が見えてくるのです。一つの分野を極めてその分野の中ではコミュニケーションができて、他分野とのコミュニケーションが苦手では課題を解決できないのです。本学の元の3つの研究科(情報科学、バイオサイエンス、物質創成科学)はいずれも科学の基盤として重要ですが、一致協力してこそ課題解決に寄与できるのです。

これは研究者同士の交流に限りません。教育においても、学生が異なった分野に興味を持って履修、研究ができるようにすると、いろんな分野のエキスパートとコミュニケーションができ、分野をまたいで活躍できる人材を社会に送り出すことができる、と考えています。

——大学院の中で高度な研究をしながら、社会的課題の解決につなげるのはいいですね。

塩崎 研究者にとっても大きな刺激になると思います。自分の研究がどう社会に還元できるのか、社会実装できるのかということを改めて考えるような機会になると思っています。自分たちの分野は何か貢献できるのか、ということですね。それは研究を深

めるためにもプラスになります。自分の研究やその方向性を違った角度から考え、見つめ直すということにもつながるのですから。

——海外では問題から入って、その解決に必要な教育を施すという流れだと聞きます。

塩崎 研究者というのは「自学自習」を身につけた人です。大学院を出て研究者になると教えてくれる先生はいないからです。自分で興味のある課題を見つけて、自分でそこへ向かって邁進する、これが楽しくって仕方ないわけです。今度高校で「理数探究」という科目ができますね。あれは我々から見ても楽しみです。課題を解決するための道筋を見つける過程を学ぶように設定されているようですから、ああいう科目で刺激を受けた高校生が増えるといいなあと、思っています。

もちろん日本の初等中等教育で、幼いころから基礎的なことをしっかりやっているというのはいいことで、強みではあるのです。例えば英語でも、日本人は文法の知識がすごいんですが、きっちりした文章を書くには文法をよく知っていることが役に立ちます。一方で文法的に正しくしゃべらないといけないというのがプレッシャーになって話すことをためらってしまう面もありますが。

——お話をお聞きしていると、貴学では学生さんに人間力を求めておられるように感じました。

塩崎 これからの社会で活躍するためには、何よりもまずコミュニケーション力が求められます。大学院においても、自分の学位論文研究を究めつつ、その内容を分野外の人に伝えたり、逆に別の分野のエキスパートともコミュニケーションができたりするような力を育てることが必要になると思います。いろいろな人たちと「共創」できる力、それが人間力ですね。社会課題の複雑化に伴って、自分の専門分野だけでは問題解決できない状況が増えていきます。多様な分野の人たちが力を合わせ、チームとして課題に取り組むためには、やはりコミュニケーションが基礎になるわけです。コミュニケーション力を含め、チームそして社会のリーダーに必要なスキルを持った人材を育てる仕掛けとして、奈良先端大の一研究科体制を高度化していきたいと考えています。